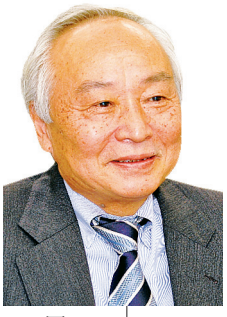
論説



宮武 剛

人生のしまいかた

タツトリかノトナレか

85歳以上の6割は要介護状態に陥る。主因は認知症、脳卒中、骨折・転倒。生活が不便になり、判断能力も衰える（厚生労働省）。

65歳以上の1人暮らしは男230万世帯、女440万世帯（2020年）。先行きは1000万世帯を超える。

1人暮らしの自宅死亡者のうち推定2万2000人は死後8日以上経過後に発見（警察庁24年）。

引き取る人のいない遺体は推定4万2000人（日本総研25年）。

一方、遺言書を書いた人はわずか3・4%（日本財団25年）。相続人がいなくて国庫に入った遺産は推定1000億円超（23年）。

そんな統計値を交え「身じまい」の大事さと難しさを語る「幸せな人生のしまい方白書」が公開された（児玉聡京大教授ら執筆、ネットで閲覧可能）。

日常生活、医療・介護、財産管理、死後対応をどうするか。多くは家族に頼ってきたが、家族がいない、家族に頼れない高齢者がどんどん増えていく。

白書は、自ら準備・決定する「立つ鳥跡を濁さず」の『タツトリ』派、「後は野となれ山となれの『ノトナレ』派に大別した。もちろん単純ではない。

気持ちはタツトリなのに行動はノトナレの『タツ・ノト』をどう支援するか。ノトナレの人を周囲の働き掛けで『ノト・タツ』に変えられないか。

事例も複雑多岐だ。

「山間部に住む男79歳は買い物や通院に車を使う。バスは数時間に1本。付き合いや趣味にも車は欠かせないが、最近は自分の運転に不安を覚える」（要約）

本人と親族で免許返納を決めれば済むのか。運転を止めて引きこもると要介護リスクは8倍になるとの研究例もある。いかに地域で「生活の足」を守るか。同時に衝突被害軽減ブレーキ付きのセーフティー・サポートカーやその車限定の免許の普及も急ぎたい。

「女性78歳は独身で兄とも疎遠。小学校の元教師で『しっかり者』だったが、最近は夜間に外を歩き回り、家にはゴミがあふれる。知人らが世話をしようとしてもすべて断る」（要約）

本人の意思と脱水や低栄養の健康リスクを見極めて近隣や民生委員の支援、介護保険の活用を勧めたい。

日々の暮らしから死後の対処まで、白書は「誰のサポートも受けずに身じまいをするのはまず不可能」と自問自答しながら「1人の高齢者が幸せな身じまいをするには村が必要だ」と呼び掛ける。

村とは地域コミュニティーだろう。政府・厚労省が長年取り組む「地域包括ケアシステム」も中学校区程度の地域で福祉・医療・介護の支え合いを目指す。いわば〝新たな村づくり〟だ。

しかし、意欲は十分にタツトリだが、遅遅として進まない「タツ・ノト」型の地域は多い。再検証する意味でも、この白書は意義深い。

（本紙論説委員）

みやたけ・ごう　毎日新聞論説副委員長から埼玉県立大、目白大大学院の教授などを経て現職